

[8]

氏名	海邊 博史
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 246 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	日本古代・中世における墳墓と石造物の研究
論文審査委員	主査 教授 米田 文孝 副査 教授 西本 昌弘 副査 教授 原田 正俊

論文内容の要旨

海邊博史氏の博士（文学）の学位請求論文『日本古代・中世における墳墓と石造物の研究』は、近畿・四国地域を中心とした古代・中世期の墳墓と石造物について、考古学的理論・手法を駆使して系統的に整理・分析した成果である。これらの作業を通じて、それぞれが包摂する諸課題に対して実証的な視点から吟味・検討し、当該時期の墓制研究と石造物研究に基礎資料を提示するとともに、新たな視座を提供することを主な目的とする。

本論文は、海邊氏の鋭敏な問題意識と真摯な研究姿勢を背景に、従来は看過されてきた感も否めない古代・中世期の墳墓と石造物について、歴史的変遷の実態を明らかにしている。海邊氏の調査研究の特徴は、何よりも実証性を重視した研究姿勢にあり、随所に学会に裨益する成果と見解を提供する。本論文は、古代・中世期の墳墓と石造物研究に一石を投じる労作であり、全 5 章 11 節から構成される。全体の章・節の構成は、次の通りである。

序章 墳墓・石造物研究のあゆみと課題

第 1 節 はじめに

第 2 節 墳墓研究のあゆみと課題

第 3 節 石造物研究のあゆみと課題

第 4 節 小結

第 1 章 古代・中世の墳墓について

第 1 節 墳墓の諸相

第 2 節 古代墳墓の諸属性

第 2 章 古代・中世の石造物について

第 1 節 石造物の地域相

第 2 節 瀬戸内海周辺の中世石造物

第3節	讃岐における石造物の諸相
第3章	信仰と流通からみた石造物
第1節	信仰モニュメントとしての石造物
第2節	流通からみた石造物
終章	
	引用・参考文献
	表・挿図出典
	初出一覧

序章では、本論文の目的と構成を簡潔・明確に記述するが、先行研究が希薄であり未成熟の論点が多岐に及ぶ当該時期の墳墓と石造物に関する研究史の悉皆的な読破・整理を背景に、的確に抽出された現状と課題の認識に続き、問題意識の所在を明らかにする。

第1章では、当該時期における墳墓の概観と派生する諸問題について、当時の社会的背景の一側面が墓制に反映されているという視点から考察を加える。特に、古代墳墓では事例の悉皆的な集成を基礎に、その諸属性について包括的な分析・検討を実践する。その結果、近畿地域における旧国単位の諸様相の吟味・把握から、地域単位の集合・共通性を把握する。また、火葬と土葬という葬制の選択や、土葬墓における規模や構造、副葬品、火葬墓における外槨施設や蔵骨器、副葬品に関する地域偏差や時期的変遷などについて順次、明らかにしていく。同様の視点から、中世墳墓でも四国地域の旧国単位の様相を把握し、屋敷墓や集団墓地、造立階層、中世墳墓の終焉などの諸課題を考察する。さらに、中世墳墓と石造物の関連問題についても言及する。

次いで、火葬墓が包摂する一連の課題において、群設定や墓域、火葬灰埋納土壌、蔵骨器の選択とその埋納状態などを考察する。例えば、群設定では同一標高を手掛かりに複数グループに細分し、各群の火葬墓に時期差を看取するが、この要因として血縁関係などを基調とした世代単位の墳墓が造営された反映である可能性を指摘する。また、墓域では密集型と散在型の2種類に大別し、墓域の占有空間から造墓主体に差異があると推測するなど、重要な視点を提示している。

第2章では、各地に散見される古代石造物の遺例を確認した後、四国地域の古代石造物を詳細に検討し、中世石造物との関連性は希薄であるという重要な観点を示唆する。中世石造物では四国地域を旧国単位で概観し、石材ごとに塔種や時期的変遷を確認し、分布論や地域の特性、広域流通の状況などを整理・分析する。また、西讃岐という小地域をモデルケースとして、石造物の変遷や特質を詳細に分析し、周辺地域や遠隔地との交流などの諸問題について微視的な視点から縦横に検討・吟味を行い、石造物が一地域史にとどまらない歴史資料として活用できる可能性に注視する成果を得ている。

また、西日本各地に広く流通する六甲山南麓産の花崗岩製石造物の中で、五輪塔など他の塔種と比較した場合に編年的研究が遅れている宝篋印塔について、相対的な年代観を樹立する目的の型式変遷試案の提出をはじめ、安芸・伊予地域周辺や讃岐地域に所在する、各種の石造物の集成・検討から抽出した属性・変遷などを基礎にする諸成果

も重要である。

第3章では、石造物を信仰と流通の側面から多角的に検討する。まず、考古学的な検討の深化が困難である石造物に関わる宗教性の考察では、中世集団墓地の中心や最奥部に立地する大型石塔（総供養塔）を俎上に、村落構造の変遷や宗教活動と総供養塔の関連について推測する。さらに、磨崖仏や磨崖五輪塔、十三仏信仰に伴う石造物などについて、その源流や変質・形骸化の過程を探求し、各個に発現した地域色を看取るなど、その変容する姿を如実に描き出す業績も優れた成果である。

また、瀬戸内地域における中世石造物の地域間交流の実態を解明する一例として、紀伊に運ばれた讃岐の火山石系石造物を検討し、広域間で流通した実態を把握する。四国遍路にともなう丁石の検討では、四国地域と列島各地における丁石を比較・検討し、四国地域の丁石の石材は県外から搬入される一方、その形態は四国地域に特有であるという実相を明らかにする。さらに、中世石造物からみた朝鮮半島との交流の可能性についての言及では、中国からの技術伝播を推定する従来の論説とは別に、現地調査を通じた実証的な観点から、朝鮮半島の石造物にも日本列島の石造物と共通する要素を認める。その結果、東アジアにおける技術交流の双方向性を看取・想定するなど、その調査研究は時代・地域に新たな地平を開きながら、精力的に展開・発展させている。

終章では、関連する史資料や研究成果を参照しながら、前章までに獲得した諸成果を視野に古代・中世期の墳墓と石造物に関する歴史的意義を吟味・整理し、本論文の命題に対する見解を要約し、これまで論究した本論文の内容を総括するとともに、本論文の作成で明らかになった今後の検討課題や調査研究の方向性を叙述する。

論文審査結果の要旨

本論文は、古代・中世期における墳墓と石造物について実証性に重点をおいた史資料調査を基礎に、その実態と変遷過程の諸様相を把握し、構造的な理解を連関・体系的に叙述することを主な目的としている。この目的を達成するため、海邊氏は関連する遺構・遺物を悉皆的に集成・吟味して検証する。後述する公聴会での議論にみるように、今後さらに論点を深化・解決すべき点もあろうが、先行研究が乏しい当該分野の調査研究に対して果敢に挑戦・肉薄し、従来は個別・断片的に報告・言及されてきた墳墓と石造物に関する論説を統合的に勘案し、着実に前進させた実証的な研究成果のひとつとして高く評価できる成果である。以下、本論において海邊氏が提示する独創的な着眼点や優れた成果を要約する。

まず、古代・中世墳墓の調査研究では、詳細な個別的事象の整理・把握を基礎に、近畿地域と四国地域の事例の比較検討から、造墓の諸様相について近畿地域の中心部と周縁部、遠隔地を視野に、各地域独自の墓制が展開していく過程を明らかにする。すなわち、近畿地域を中心にした当該時期の墓制研究から得られた成果である、絶対的象徴であった天皇をはじめとした最上位階層の喪葬が急速に社会的な意義を変容させるという現象に連動し、葬送儀礼は汎畿内的な斉一性を喪失し、地域色の顕在化が進

んだという見解を補強する成果を得ている。

また、石造物の調査研究では、各地に散見される古代石造物の遺例を確認した後、四国地域の古代石造物を詳細に検討するが、多様な石造物の変遷や特質を実証的に整理・分析した成果は、この分野における調査研究の基礎資料として重要である。これを出発点に、周辺地域や遠隔地との交流などの諸問題についての微視的かつ巨視的な視点から検討・吟味を試行するが、東アジア地域を視野に一地域史のみならず、広範に活用できる可能性を秘めた歴史資料として、石造物の重要性や将来性に注視する姿勢にも注目できる。

公聴会においても、本論文で提示された成果や見解、論点は高く評価され、充実した論文内容に相応した、多岐に及ぶ活発な意見交換や質疑応答が交わされた。まず、古代墳墓と中世墳墓の画期設定についての議論では、8世紀初頭の火葬墓導入と盛行、その後の土葬墓への回帰、さらに火葬墓と土葬墓が混在する変遷を明確にする。この過程において、火葬墓は当初、専用の藁壺や金属製蔵骨器、石囲い・石櫃などの外郭施設・外容器の使用など、丁寧な埋葬方法が採用されていたが、次第に蔵骨器は土師器をはじめとした日常雑器・転用器へ、さらに直接埋納などへと簡素化することを明らかにする。同様に土葬墓でも、当初は槨構造形態を採用していたが、やがて棺を直接埋納する形態や棺自体が存在しない土壙墓などに変遷する。このような簡素化（薄葬化）の傾向は、階層性なども要因の一つであるが、そのような単純な図式に収斂させることはできず、葬法の選択には氏族や個人の習俗をはじめ、輻輳した要素の反映にあると想定する。

また、四国地域において屋敷墓が14世紀前半に斉一的に減少して断絶し、中断期を経て15世紀後半以降に再造営される現象において、断絶の意味や畿内では希少な中世後期における屋敷墓の存在などに関する議論では、畿内における中世前期の屋敷墓に関する先行研究の成果から、四国地域でもその消長が近畿地域と連動すると評価している。一方、中世後期の屋敷墓の解釈は難しいが、近世以降に継続する屋敷を守護する屋敷神との関連性を想定している。

石造物に関する議論では、古代石造物や十三仏石造物についての議論を経て、石造物地域圏の枠組みや石造物の流通実態からみた宗教的・社会的な背景を復原する限界点などに関する活発な議論が交わされた。本論文における地域圏は同質石材・同形態の集合体として設定されているが、当時の在地勢力や宗教的背景との関係を明確にすることは困難である。ただし、火山石など広域に流通する石造物地域圏を認識することから、従来の土器研究などから復原される流通とは異なる実態が素描できる可能性が高いことについて言及された。

また、本論文では11世紀に古代墳墓の画期を設定することについて、天皇の葬法からみると火葬だけが画期とはできず、仏教と火葬の関係では仏教を重視した聖武天皇が土葬であるように、火葬と仏教を直接結びつけることに対する疑義や、中尾山古墳の墳形や埋葬施設の規模・構造から勘案した評価などが問われた。さらに、古代墳墓の火葬墓・土葬墓選択に関する議論や、宗教空間を厳密化した調査研究の深化の必要性などについて意見が交わされた。また、墳墓と石造物の相関について、石造物造立の宗教的意味が不明瞭な部分も多くある現状ではあるが、本論文でもこれらの点について必ずしも十分な論究がないことや、中世墳墓・石塔の終焉に関する問題、石造物の造立背景について明確な言及がないことなど未到達な部分もあるが、海邊氏はこれらの諸点について今後明らかにすべき

課題と十分認識している。

以上を総合して、本論文は古代・中世における墳墓と石造物の実証的な調査研究を基礎に、墓制と葬送儀礼の実像を読み解いて、社会・政治的な意義を探求することをはじめ、従来にない独創的な視点と鋭敏な問題意識から総合的に論じた専門的な研究論文であり、今後、考古学はもとより古代・中世史学、民俗学をはじめとした関連諸分野に波及する影響は多大なものがあると判断する。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。